

カナダオンタリオ水俣病とドクターハラダ

大類 義

カナダ在住・映画監督

はじめに

原田正純医師が、出来得る限り患者さんをその生活現場に訪ねて診続けたことは周知だが、その検診訪問先は世界各地に渡り、地球儀に印せばどこから見てもその印の見えない角度はない程だ。その中でも長期に渡り交流を重ねた相手にカナダの居留地に住む先住民がいる。1975年春に初訪問してから、同年の夏、2002年夏、2004年の夏、最後の2010年春の訪問まで計5回の検診訪問を35年に渡って行った。またこの間、1975年、2005年、2006年、2011年には逆に日本へ先住民を招待する際、原田医師は、その中心的役割を担った。

1975年に初めてカナダ先住民と原田医師を繋げたのは、当時、水俣で写真集の製作活動に従事していたアイリーン・スミスである。それから一気に27年を経て2002年のカナダ訪問からは、当時既にカナダに移住していた私が現地案内をさせていただいた。たまたま私は同居留地でドキュメンタリー製作のための調査中だったことから、2002年には既に現地に知人もいた。続く2004年および2010年の検診訪問もお手伝いさせていただいた。

結果として1975年の検診調査を、約30年の後に追跡調査する機会となった。その意義について原田医師は書いている。「1975年当事の頭髮水銀値と臨床症状が長期経過後にどのように変化しているかを明らかにすることは、メチル水銀の長期、比較的少量汚染が健康に及ぼす影響や安全性の問題の解明にきわめて有用である。同時にわが国における長い病像論に決着をつけるという重要な意味も持つ。このような長期経過後の追跡調査は世界的にも見られない貴重なものである。」(原田正純ほか、2005、pp.3-4)

カナダで行なったそれぞれの検診については、原田医師ご自身が論文で詳しく報告されているので、ここでは、それらの活動がカナダでどのように伝えられたかを知るため、当事のカナダで発表された書籍、新聞、テレビ、ラジオの記録を集めてみた。中にはカナダの政治家や官僚のインタビューもあり、原田検診調査に対する政府の見解が表れている。また訪問前史や各訪問の前後にこちらで起きたことも添え経過順に構成した。ドクターハラダとして身をおいた当時のカナダの雰囲気が伝われば幸いである。

1. 潜在する水銀問題

原田医師が検診訪問した先住民居留地は、カナダのほぼ中央、オンタリオ州北西部に位置するグラッシーナロウズとホワイトドッグである。現在人口それぞれ約950名、約840名の小

さな村々で、1975年の初訪問時には、それぞれ約450名、約700名だった。私が初めてグラッシーナロウズ居留地を訪ねたのは、移住後2年経った1999年の事だった。カナダの水俣病については原田医師の著書と土本典昭監督の著書を通して、既に日本にいる間に知っていた¹⁾。たまたま私達家族が住むウィニペグ市が、グラッシーナロウズとホワイトドッグまで車で4時間程の距離であることから訪ねてみることにした。

あらかじめカナダと日本での水俣病事件を並記した年表を作成して勢い持参したが、こちらの期待に反し現地で会った人々の水銀問題に対する関心は薄いというか、むしろ諦めのようなものを感じた。その理由は後に学ぶことになったわけだが、まずカナダ政府が水俣病像をいわゆる典型的重症に限り、また頻繁に見られる神経症状を認知しながらも、原因を水銀に特定することが不可能だとし、水俣病発生を認めていない事がある。また1976年に両居留地が、汚染源企業を相手に訴訟を準備したものの、オンタリオ州最高裁判事の介入で仲裁過程へと導かれ、1985年には和解調停に達し、補助金が支払済だった事もあるかもしれない。さらにその補助金の一部を基金にして水銀障害ボード（Mercury Disability Board）が設立され、神経症状を訴える住民の申請に対応して、一定の査定基準を満たした申請者には、年金が支給されるという措置もとられていた。そして1971年以来、毎年続いた両居留地の住民の水銀値検査も、安全基準（血中値100ppb／毛髪値30ppm）以下まで下がった事を理由に1996年に終了していた。1999年にいまさら日本人に來られてもどうしようもないという事だったのだろうか。さらにメチル水銀中毒症状が、アルコール中毒症状と類似してる事が、先住民の健康被害を軽視さらには誹謗中傷する原因になっていた。しかし、そもそも酒を飲まずにはいられないような先住民の狩猟採集生活環境破壊の実態があるわけで、水銀汚染で生活環境が破壊されれば、ますます飲酒するという悪循環だといえる。

また生活破壊の要因是水銀に加えて他にも多くある事実を、私は教えられることになった。その一つとして、先住民が狩猟採集生活を続ける上で欠かせない森林を、一斉に伐採してしまふ皆伐がある。それに対する抗議行動が進行中であった。水俣病問題はひとまず置いておくことになったが、伐採問題のインタビュー撮影中にも、今日の伐採抗議運動は、1975年の水俣病関係者との交流から学んだ成果だという話が飛出すなど水銀問題を忘れることは決してなかった。

2. オンタリオ水銀汚染

グラッシーナロウズとホワイトドッグへ流れるイングリッシュ／ワビグーン河へ、上流のドライデン市にある製紙会社が、無機水銀を含む廃液を放流し始めたのが1962年である。カナダにおける河川や湖の水銀汚染が一般に明らかになったのは1970年前後だが、それまでカナダでも水銀は、自然環境に合法的に廃棄されていた。水銀汚染が最初に確認されたのは、1967年から68年にかけて、アルバータ州で水銀殺菌された種を食べる鳥や、サスカチュワン州サスカチュワン河の魚や、オンタリオ州セントクレア湖の魚に高水銀値が発見された時

だった。発見したのはノルウェーからの留学生だった。彼はその調査結果を両州に報告したが反応がなく、1969年に独自に公表したところ、初めてアルバータ州は、鳥の猟シーズンを閉鎖し、またオンタリオ州は、自らの調査に動き始めるという後手後手の対応だった。同年、イングリッシュ／ワビグーン河下流では、同留学生が安全値（0.5ppm）の40倍程の水銀値を示す魚を発見していた。（Shkilnyk, A、1985、 pp.187）

年が明けた1970年に、オンタリオ州政府は漁獲禁止の措置をとった。先住民漁師は事もなく失業したが、生活習慣として河の魚を食べることは続いた。また行楽客の釣りは観光業保護のためか「釣っても河にもどす」を条件に許可され続けたので、汚染を知らない客や、毎回客の釣った魚を客の昼食用に湖畔で料理する先住民ガイドは、汚染魚を食べ続ける結果となった。先住民ガイドが、汚染について観光客に知らせる事は、直ちに解雇を意味した。そして何よりも魚摂食は先住民にとって文化的にも経済的にも必要不可欠だった。

同年に州政府は、水銀を自然環境へ廃棄することを違法化する措置もとった。しかし実態は、1971年の禁止法施行後もドライデンの製紙会社は、代替施設完成までさらに5年間、水銀を廃棄し続け、罰則を科せられるどころか政府から高額の財政援助を受けたのだった。

オンタリオ州政府は1962年に水銀放流を認可してから1970年に違法化するまでの8年の間、1965年に淡水の河魚を食べて来た結果、新潟水俣病が発生した時も、1966年にスウェーデン政府が穀物の種の消毒保存に水銀を使用するのを禁止した時も、さらに1968年に日本政府が、水俣病の原因が工場廃水に含まれるメチル水銀であることを正式に認めた時でさえ何ら対応していない。

1970年、グローブアンドメール紙のフランシス・ラッセル記者が、オンタリオ州の環境規制局長に「なぜ日本やスウェーデンでの水銀汚染調査論文を読んだ直後に、州政府はカナダの水銀の危険性についてチェックする措置をとらなかったのか？」と聞いた。そのインタビュー記録をワーナー・トロイヤー が著書 “No Safe Place” に転載している。

局長は2つの理由を述べた。「日本人は我々よりはるかに多くの魚を食べるし、公害を規制する政策がない。（それを言うなら、カナダやアメリカでも同様、塩素アルカリ工場に関する限り規制政策はない。）もう一つの理由は「日本とスウェーデンの資料は全て持っていたが、日本語やスウェーデン語で読めなかった」というものだった。

さらに「1969年に政府が、河の沈殿物の水銀値が大変高かったことを発見した時に、なぜ魚の水銀値も調べなかったのか？」と質問した。その答えは「あの時点では、水銀が魚に吸収される事など、我々は知らなかった。」というものだった。

（Troyer, Warner、1977、 pp. 25）

「あの時点」というのは1969年だから、新潟水俣病発覚の5年後、また水俣病の原因について日本政府が公式見解を発表した1年後であり、水銀が魚貝類に吸収されることを知らなかったという言い訳は成り立たない。読めなかったと言うが、スウェーデン論文の英語版は

1966年から出版されていたし、日本の通称赤本『水俣病』や原田医師を含む熊本大研究班の論文『胎児性水俣病』の英語版はともに1968年には出版されていた。

3. 人間への汚染

カナダでまず公式に発見された水銀汚染の被害対象は、鳥や魚であった。では人間への汚染を、カナダ政府はどうみていただろうか。イングリッシュ／ワビグーン河の汚染魚を最も日常的に食べていた人々は、下流に位置するグラッシーナロウズとホワイトドッグの住人だったが、水銀を廃棄し始めたのが1962年だから、汚染が発覚した時点で最長8年間、高度の汚染魚を食べ続けていたことになる。

オンタリオ州政府はまず、この住人の水銀値を1970年から測り始めた。これは後にカナダ連邦政府ヘルス省によって引き継がれた。

最初の年に測ったのはグラッシーナロウズの38人、ホワイトドッグの65人で、ともに当時の居留地在住人口の1割前後に過ぎない。それでも血中値で危険値とされる100ppb以上だった住人は、グラッシーで10人（最高値319ppb）、ホワイトドッグで22人（最高値660ppb）と記録されている（Health Canada、Medical Services Branch、1979）。

この結果は3年後の1973年に本人あてに通知された。100ppb以上の危険値を示した人への通知には以下のような記述がされていた。「今回の検査測定および問診からみて、水銀があなたの健康に影響を及ぼしている兆候はありません。しかし水銀の影響の専門家なら、あなたの水銀値は高過ぎると思うでしょうし、安全予防のためにも下げる事が賢明でしょう。」通知を読んだ人々は怒ったか、むしろ無関心だったと聞く。水銀値が高いが健康に影響はないとは、一体どういう事なのか？ また高い値を下げるにはどうすればよいのか？ 水銀値はいくつまでなら安全なのか？ 説明も何もないとなれば誰だって怒るに違いない。居留地住民は実際に何をどうしたら良いか分からない不安状態に置き去りにされたのだった。

4. 1972年の不安

この通知が届く1年前の1972年に、不安が一挙に高まる事件が起きていた。グラッシーナロウズで魚の多食家で知られるガイド業のトーマス・ストロングが突然死したのだ。強健なトラッパーで42歳の若さだったトムは、死の直前、体重が減退し、歯切れの悪いしゃべり方になり、そして胸の軽い痛みを訴えていたという。そして居留地内でトムの水銀値は許容量の10倍だったという噂がひろがった。オンタリオ州管轄の検死解剖が行われたが、結果は公表されなかった。バンドが州政府に要請して初めて説明会が翌1973年に開かれた。トムの死因は急性の冠状動脈血栓症による心臓発作という結果で、水銀の関与は否定された。驚いたことに死後の血液サンプルの水銀値は、安全値の11倍だったが、州のヘルス庁のストーブ医師は、血液サンプルが、水銀で汚染された試験管に保管されたためだろうと説明したという

(Troyer, W、1977、pp.227)。なお水銀が血管障害を引き起こし心臓発作につながることは今では広く説かれている (Hightower, Jane M、2008、pp.211)。

さらに同年、やはりガイド業のマルセル・パパセイとその妻ロージーの間に、息子のキースが先天性の異常をもって生まれていた。キースが4歳になり、異常が傍目にも明らかになった1976年、オンタリオ州ヘルス庁大臣代行のベティー・ステューブソン医師は「キース・パパセイは脳性麻痺であって水俣病ではない」と言った (Troyer, W、1977、pp.161)。言うまでもなく脳性麻痺とは病名ではなく、脳損傷の症状名である。水俣病も水銀による脳破損の為に脳性麻痺の症状を示すという事であり、ステューブソン医師の見解は意味を成さない。水俣病でないことを証明するためには、キース出生時の水銀値を示すべきだが、それもせずにただ脳性麻痺だと言ってのけたステューブソン大臣代行の言動は、理解に苦しむ。

5. 猫実験

水銀汚染発覚以来、魚摂食が危険だといわれて街で食品を買おうにも、先住民は漁業やガイド業を失い困窮していた。居留地の福祉受給率が一挙に上昇した。さらに居留地内で魚を食べていた猫がふらふら歩きだすという、それまで見たことも聞いた事もない光景が繰り返されていた。長年、自然の恵みで生きてきた先住民なればこそ、直観では魚の毒だと確信していても、「証拠」がなかった。

「証拠」を握っていたのは実はカナダ連邦政府だった。首都オタワのヘルス省では、猫に工場下流の水銀汚染魚を与える実験を1970年に開始しており、被験猫は全て100日前後で水銀中毒症状を示すという結果を得ていた。ただしこの結果は両居留地住民も含め一般には知らされなかった。それが知れることになったのは1975年にカナダ政府ヘルス省の雇員が激しく追求されて吐露したからだ。激しく追求したのは、実は日本からカナダの水銀汚染を調べに現地に赴いていた第1次世界環境調査団の人々であり、原田医師もそのメンバーだった。

6. 日本からの調査団

そもそも日本にカナダの水銀汚染を知らせたのは、グラッシーナロウズのそばで行楽ロッジを営んでいたアメリカ人のマリアンとバーニー・ラム夫妻だった。水銀汚染を隠してでも営業を続けていこうとしていた多くのロッジ経営者に反して、2人は汚染実態を明らかにして賠償を求める態勢をとっていた。そのマリアンがカナダの水銀汚染について、水俣に数年滞在して写真集を作成中だったアメリカ人夫婦のアイリーンとユージン・スミスに手紙で知らせたのだった。さっそく1974年に現地のグラッシーナロウズとホワイトドッグを訪れたアイリーンは、日本の原田医師や宇井純氏に連絡してカナダ水俣病の状況を知らせた。そして翌1975年3月には原田、宇井両氏を含む第1次世界環境調査団が編成され、アイリーンの案

内でカナダを訪問したのだ。先住民にとっては水銀汚染発覚以来5年間、情報不足の不安に耐えてきた末の希望であった。

7. オンタリオ州自然資源庁大臣

原田医師は1975年にグラッシーナロウズとホワイトドッグを二度訪れている。最初は3月に、二度目は8月にある。両居留地での検診については原田医師自身が書かれている²⁾。従ってここではその検診がカナダでどう報道されたかをみてみたい。

8月、二度目にカナダを訪れた日本の検診調査団はオタワの連邦政府ヘルス省まで出掛けで行った。5ヶ月前の3月に両居留地で行った検診と毛髪採集の報告論文を提出するためだ。その同じ日のCBCラジオ番組“*As it happens*”が、日本からの検診調査団について放送した。その番組中、オンタリオ州自然資源庁大臣レオ・ベルニエは、不快感をあらわに原田医師らに関して次のようなことを言った。

ベルニエ：「インディアンやドライデン市が水銀に影響されているという証拠はない。グラッシーナロウズのインディアンは何の傷害も受けていない。カナダ政府は、日本人ではなくカナダ人の専門家がインディアンの傷害を確認しなければ動くものではない。私と思うに、日本の『旅回り楽団』が両居留地を訪れて1日か2日程度の調査で発見した事などに依拠できない。」

(CBCラジオ番組“*As it happens*” Mercury poisoning in Grassy Narrows? 1975年8月20日放送)³⁾

その後、この「旅回り楽団」発言が、一般からの反発を買いレオ・ベルニエ大臣は謝罪を余儀なくされたという。

8. カナダTVドキュメンタリーにみる原田検診

ヘルス省の官僚が公表した先のカナダの猫実験についての記録映像は、CBCテレビのドキュメンタリー番組“*The Fifth Estate*”に登場する。その実験猫がよだれを垂らし失調症状を示す映像に続いて原田医師のインタビューが英語のふき替えで登場する。インタビューをしているのは前述の“*No Safe Place*”の著者ワーナー・トロイヤーである。

原田：「今、私達が分かっている事は、魚が水銀で汚染されていること、それを人々が食べていること、そしてネコにまぎれもないメチル水銀の中毒症状が顕われていること。日本でも新潟や水俣で、まずネコがやられた。ネコの次には必ず人間にくるということです。」

(CBCテレビのドキュメンタリー番組“*The Fifth Estate*” Grassy Narrows Disaster 1975

年9月23日放送)⁴⁾

9. カナダ書籍にみる原田検診

トロイヤーは同ドキュメンタリー番組に、1975年に原田医師が検診している場面も使用しているが、その場面を取材撮影した時の模様を自著に以下のように記述している。なおトロイヤーは本文中に「原田論文」を頻繁に引用している。

水銀値500ppbを示した釣りガイドのマセウ・ビーバーはグラッシーで採血された住人の中でいつも最高値だった。1975年8月、私はCBCの仕事で、熊本大学体質医学研究所教授の原田正純医師がマセウ・ビーバーの神経症の検診をするところを撮影した。原田医師は水俣病診断においておそらく世界の誰よりも広い経験の持主だろう。

診察中、彼はマセウ・ビーバーの以下のような水俣病の症状を見いだしていた。

1. 視野狭窄（トンネル・ビジョン）
2. 振戦（手を静止させようとする際に顕示）
3. ロンベルグ・サイン（両足を揃えるとバランスがとれない）
4. グローブ・ストッキング・シンドローム（四肢末端知覚障害）
5. 口周辺知覚障害
6. 聴力障害（マセウは耳元のストップウォッチの秒針の音が18インチ離れると聞こえなくなった。CBCのマイクですら8フィート離れたところからでも録音できた）
7. 反射異常
（略）

1975年には二つのテストが行われていた。最初のは熊本大学の原田正純医師に3人の医師を加えたチームだった。チームは二つの居留地の招きで来たが、旅費を実際に負担したのは日本でのカンパであった。検診結果は後に正式論文になった。以下はその原田論文の部分引用である⁵⁾。

「最初、既に公表されていた資料を集めたが、データはばらばらだった。(略)次に水銀汚染がひどい現場へ出かけ、疫学的臨床的調査を毛髪水銀採取とともに行った。(略)居留地住民のほとんどは魚を食べ控えていたが、通常的にまだ食べ続けてるといふ人達もいくらかいた。また魚の卵を混ぜたパンを焼いて食べていることがわかった。(略)私達の分析ではパンの水銀値は、0.44ppmを示し、そういう食べ物は魚より頻繁に食べるので危険なレベルである。」(原田正純ほか、1975)

熊本大学調査医師等は現地の子猫と、おとなの猫が水俣病症状を示すのをみて、その子猫の兄弟猫にホワイトドッグのそばの湖で獲れた魚を与え、その後1975年2月に病理学者の武

内医師に病理解剖してもらい、結果をレポートした。レポート曰く「これらの猫の症状は、水俣でメチル水銀中毒した猫にみられた症状と全く同じであった。」

日本チームは、独自に居留地で臨床テストを行いながら、6歳から84歳にわたる計89人の検診を済ませていた。

原田論文によれば（下線トロイヤー）（原田正純ほか、1975）；

「検診の対象になったのはおおむね健康な人々だった。（略）入院中や自宅で寝たきりの人は除外した。（それら病弱者は1976年末までに誰かに診てもらう必要があった。）臨床検診では、一般的神経症状診察と視野検査、（略）多くの神経症状がみられた。この神経症状の全てがメチル水銀に起因するとはいえない。他の病気からくる神経症状と注意深く判別しなければならぬ。しかし水俣病に頻繁にみられる症状＝知覚障害、聴覚障害、視野狭窄、震え、失調がすぐに確認された。」

（略）

四肢末端の知覚障害は眼球運動異常と同様、水俣病の最も特徴的な症状であるが、アルコール中毒や糖尿病にもみられることから、他の（水銀起因性の＊著者）症状と抱き合わせで顯示されるはずである。失調や構音障害は水俣病でも急性劇症にみられる重要な症状である。

最後に再び原田論文の「考察」部分から引用する；

「カナダの現状は水俣病が大量発生する前の水俣に酷似している。（略）たとえ日本とカナダの間に罹病率や症状のひどさ、また他のファクターに違いがあっても本質的には違わない。」

（略）

非典型、軽症の方が典型、重症よりはるかに多いことが分かってきた。症状が軽いため知覚障害しかみられない患者がいた場合、その人の家族内に典型がいない限り、またその地域の水銀汚染が証明されない限り、決定的診断とはなりがたい。（略）

典型的（重症）ケースが発見されるまでメチル水銀の影響を無視するのは間違いである。（略）典型的ケースが不在でも、視野狭窄と知覚障害が頻発している場合は水銀中毒を疑ってかかるべきである。

とりわけ同じ家族内に流布していればなおさらである。（略）水銀血中値か毛髪値が高い人々の中に、四肢末端知覚障害15例と両側性求心性の視野狭窄9例がみられ、その中の幾人かには家族にも同様の症状がみられた。このような場合にメチル水銀の影響が疑わしいのである。速やかにさらに詳しく検診をする必要がある。」（Troyer, W、1977、pp.152,155-157）

トロイヤー自身は、引用部分の選び方や、彼自ら下線で強調した部分を通して、オンタリオで日本の水俣病と本質的に同じ病気が発生しているとの原田医師の警鐘を率直に伝えている。

次に原田医師等の検診を紹介した文献として、同じく1977年にジャーナリストのジョージ・ハチソンが著した本“Grassy Narrows”がある。検診についての記述は以下のように始まる。

アイリーン・スミスは1974年の訪問を通して日本の科学者達に伝えるべき情報をつかんでいた。東京大学の都市工学の専門家、宇井純および熊本大学の水俣病診断の第一人者、原田正純はそれを聞き、自ら現地へ出かけることにした。彼らは、1975年3月に両居留地で約20人の検診を行った。

「メチル水銀中毒の症状がみられました」と原田医師はトロント大学のゼミで報告した。「検診を続ければ最終的には水俣病患者に出会うと確信します。公害問題でさまざまな失敗を重ねた私達日本人にとって、この実態は大変ショックです。私らが日本でおかした失敗を繰り返さないよう是非お願いします。」

宇井博士は「今、行動しなければ、我々よりもっと深刻な結果になるだろう」と述べた。調査団の面々がオタワ訪問中に連邦政府の官僚に検診方法について問い正したところ、官僚はクレイ湖⁶⁾で獲れた魚を猫に与える実験をしたところ水俣病を発症した事を初めて公言した。その実験のことは、グラッシーナロウズとホワイトドッグの住人には伏せられていた。
(略)

先住民と水俣の人々は 堅い意志で結ばれ、1975年夏のさらなる地球規模の旅へとつながった。今回は原田医師と数人の医師による小グループで、原田医師にとっては二度目のカナダだった。

原田は熊本大学医学部の研究者として水俣病患者を広範囲に診てきており、有機水銀中毒の診断に関して広く世間の認めるところである。彼は前回3月の検診で発見した症状のフォローアップに意欲的だった。そしてグラッシーやホワイトドッグの住人にみられた水俣病の疑いが、たとえ初期段階であったとしても水俣病なのかどうか気にかかっていた。

「状況は明らかに日本の水俣と新潟で起きた事の再現です」と原田は驚くべき発見を含む彼のまとめの中で警告した。89人の住人を検診した結果、眼球運動異常19例、聴力障害40例、知覚障害37例、視野狭窄16例、振戦21例、反射減退20例、失調8例が認められた。

「四肢末端知覚障害と視野障害が、血中もしくは毛髪水銀値の高い住人にみられた。そのうち家族にも同様の症状がみられるケースがいくつかあった。そのような場合メチル水銀の影響が疑わしい。」(Hutchison, George, 1977, pp.111)

以上、ハチソンの引用も原田医師等の警告をそのまま伝えようとしている。

10. オンタリオ州政府ヘルス庁大臣

同じ時期に、オンタリオ州ヘルス庁としては1975年から76年にかけて大臣フランク・ミ

ラーが、日本とイラクに現地調査のためカナダ調査団を差し向けた。日本に来た時には原田医師も調査団に会われたそうだ⁷⁾。

この調査団を送ったオンタリオ州ヘルス庁大臣フランク・ミラーがCBC ラジオ番組“Morning side”で原田医師について述べている。討論の相手は前述書を出版したばかりのハチソンである。

番組ホスト：「(ミラーに) 何人の子供が水俣病と診断されたのか？」

ミラー：「ゼロだ。日本から来た原田医師が水俣病の可能性のある人が幾人かいると表明したが、日本に送ったカナダの調査団が原田医師に会った時にはその表明を撤回したと聞いている。原田医師は精神科医なのだ。原田医師の診断が信頼できないと疑う日本の医者がある。名前はヤマグチといってクワマモト・・・」

ハチソン：「熊本です。熊本の武内医師は原田医師の信頼性を問題にしたことはない。」

番組ホスト：「どうしてこの人の事を話すんですか？」

ミラー：「彼はカナダに来て専門家と称して・・・」

ハチソン：「彼は水俣で水俣病の診断をしてきたんです。大学の研究者としてです。彼がカナダに来て調査をして彼の言葉で言えば、“明らかに水俣と新潟で起こった事の再現です”という結論でした。」

ミラー：「私達政府の見解はその反対で大変憂慮している。」

(CBC ラジオ番組 “Morning side” 1977年4月27日放送)⁸⁾

11. カナダ政府の見解

カナダ政府ヘルス省が1979年に発行した“Methylmercury in Canada 1-3”では原田報告論文について、わずか数行の記述があるのみである。

1975年3月、水俣で患者を診たことがある原田医師が、グラッシーナロウズとホワイトドッグを訪れた。彼は89人を診て広い範囲の神経症状を認めた。報告論文の中で「認められた神経学的所見は水銀中毒に特有のものであった。しかし、その症状は比較的軽く、症状の多くは他の要因によると思われる。」と述べた。(Health Canada, Medical Services Branch, 1979, pp.49)

この引用の仕方は圧倒的に短い上、前掲の2冊が、カナダオンタリオにおける水俣病が軽症や非典型だとしても水銀毒の影響下にあることを警鐘する意図を反映しているのと比べ、ヘルス省は軽症や非典型であることを水俣病否定の理由にしか用いていない。

同じ“Methylmercury in Canada 1-3”には、カナダ政府ヘルス省の水俣病についての定義が以下のように記されている。

もしハンターラッセル症候群／“水俣病”を、日本で（椿・入鹿山、1977）あるいはイラクで（アルダムルジほか、1974）いわれるようにメチル水銀で起こる重い神経症状群ととらえるなら、カナダではそういった症候群はいまだかつてみられた事はないと断言できる。軽い水銀中毒なら発生している可能性はあるが、いやそれとて確実に証明するのは困難だ。確かに幾人かの水銀値をみると懸念の要因であり、警戒を要する。
(Health Canada, Medical Services Branch, 1979, pp.79)

カナダ政府ヘルス省が参考にした椿、入鹿山論文は1977年と記されており、52年判断条件設立の年である。言うまでもなく52年判断条件は、症状が組み合わさって顕示されていなければ認定しないと決めて、認定件数を減らす事に貢献したわけだが、椿忠雄医師はこの判断条件を作成した認定検討会座長だった。ここで皮肉を込めて指摘したくなるのは、水銀汚染魚の発見までは日本の水俣病情報を読めなかったからとか知らなかったからと言い訳していたカナダ政府が、今度は水俣病発生を否認するためだったらすぐに日本の情報を利用した点である。

いずれにしてもカナダ政府ヘルス省は症状が重くなければ、また症状群が典型的に揃わなければ、水俣病ではないのだという考え方で対応している事が読み取れる。

12. 1975—2002

1975年は、熊本水俣病関係者とオンタリオ水俣病関係者が互いに国境を越えて活発に交流した年である。3月と8月の二度に渡って原田医師等がカナダを訪問、その間の7月にはカナダ側からも両居留地の代表者5名が支援活動家やジャーナリストを伴い、水俣、新潟をはじめとする日本の諸都市を訪れた。続いて9月には水俣から患者さん3名に水俣病記録映画を製作した土本典昭等が加わってカナダを訪れ、その映画の上映活動もした。その時のカナダでの様子は土本典昭が著した『水俣映画遍歴』『わが映画発見の旅』に詳しい。

さて次に原田医師が再びカナダを訪れて検診をするのは2002年であり、実に27年の歳月が経過したので、その間のカナダ側の大きな出来事にふれておきたい。

13. 仲裁から和解へ

オンタリオ水俣病が熊本水俣病と大きく異なる点の一つは、裁判ではなく仲裁を通して和解したことである。仲裁がどのようにして進められたかについては、“A Poison Stronger Than Love - The Destruction of an Ojibwa Community（毒は愛より強し あるオジブエ族コミュニティの崩壊）”に詳しい。著者アナスタシア・シキルニックは原田医師訪問の翌1976年にカナダ政府インディアン省との契約で、グラッシーナロウズの荒廃したコミュニティを再生するために居留地に着任して、当時の現状を直に目撃した人だ。その後、政府

との契約が切れた後も、酋長サイモン・フォビスターに乞われて1979年までアドバイザーとしてグラッシーに2年間住み込んで援助活動に携わった。従って、裁判を検討し始めた1976年から仲裁を選ぶ1978年までの経緯を居留地の内側で間近にみたことになる。その間の経緯をシキルニックの著書に基づいて要約すると；

1976年中、オンタリオ州政府は、冷凍魚の供給、保育園設置、水銀関係会合参加への資金供与、伐採機械、植林の仕事などの援助を次々と実施していた。連邦政府も魚に替わる栄養源の指導などをしていた。しかし、そのどれもが実際には低額援助のため短期間かつ単発に終わり、長期的自立につながる職業訓練にはならなかった。先住民にとっては本業は失うが、それに替わる本格的生業は見つからず、ますます福祉依存が慢性化していった。

しかし闘いを止めた訳ではなかった。1977年、両居留地の両酋長と住民有志が原告としてドライデン製紙をオンタリオ州最高裁に提訴した。裁判費用はカナダ政府インディアン省が負担するというものだった。

同時期、オンタリオ州北方開発事業の環境へ及ぼす影響を調べる委員会の州最高裁判事ハルットが1978年に両居留地から事情聴取をするためホワイトドッグを訪れた。この会合でサイモン・フォビスター酋長は、現在の問題の原因について、水銀汚染による生活破壊だけでなく、教会と警察と政府による先住民文化抑圧、ダム建造や伐採とそれに伴う道路開通が先住民環境の自律性を脅かし、伝統生活の存続が困難になっている等を包括的に述べ、住民は肉体、精神、心の全面に渡り疲弊していると述べた。

判事はサイモンの説明に感心したという。そして両政府レベルと両居留地の代表で委員会を編成し、仲裁過程を進める提案をした。その際、判事は裁判が好ましい解決方法でないことも言い添えた。他でもない州最高裁判事の助言だった。さらにサイモンはある弁護士からも裁判では勝つ見込みはないだろうと進言されたそうだ。理由は「水銀廃棄を禁ずる法律はなかったから」というものだった。企業も政府も「廃棄したのは無機水銀だった（従って水中で有機化して魚に蓄積し中毒を起こすとは予見できなかった*著者）」と主張していた。熊本地裁第一次訴訟でも、まさにその点で新たに企業の社会構成員責任を問うことで勝訴したことなど知る由もなかった。1973年の熊本地裁判決は、両居留地が仲裁過程に入る決心をした1978年のほんの5年前の事だった。

1978年両居留地の酋長は仲裁過程を受け入れる合意書にサインした。しかし先の提訴はそのままにして、いつでも裁判に切り替えるカードは保持することにした。

その後、このハルットの仲裁過程は殆ど何ももたらさなかった。連邦政府が居留地移転の補償案を提案しただけで州政府が提案したものは無だった。汚染企業は仲裁過程には参加せず、水銀廃棄は1976年にとめたものの1980年と1981年ともに営業利益で年間1億7400万ドル（約174億円）を稼ぎだしていた。そのうち5200万ドル（約52億円）は政府からの援助金だった。ドライデン製紙がつぶれたらドライデン市はゴースタウンになるだろうと州政府は懸念していた。会社城下町であるという事情は水俣と同様だった。

会社が政府財政援助を受ける中、先住民の漁業とガイド業が水銀汚染で崩壊した。居留地内の殺人件数と自殺件数が異常に高まった。ただし仲裁過程で何も実現されない間、1982年に連邦政府はホワイトドッグの社会的経済的開発のために220万ドル（約2億2000万円）の援助をすることで合意に達した。翌83年には今度は州政府が同じ目的でホワイトドッグに200万ドル（約2億円）を供出することで合意した。続いて84年にはグラッシーに対して連邦政府が社会経済開発援助に460万ドル（約4億6000万円）供出することで合意した。州政府はグラッシーに対しては援助額の合意がえられず、交渉から撤退した。

仲裁過程については1985年にカナダ政府インディアン省が新たにエメット・ホール元判事を仲裁者に指名して両居留地とドライデン製紙の間の和解交渉を開始した。州最高裁判事ハルットの仲裁過程が遅々として進まなかったのが嘘のようにインディアン省指名ホール元判事の一声で同年末、両居留地合わせて1667万ドル（約16億6700万円）の和解金が提示され合意が締結した⁹⁾。(Shkilnyk, A, 1985, pp.222-230)

14. 水銀障害ボード設立

和解金の中から200万ドル（約2億円）を割いて基金とし水銀障害ボード（Mercury Disability Board）が設立された。和解合意覚え書きにはボード設立の目的について次のように書かれている。「両居留地の住人で、ほぼ一貫してメチル水銀中毒の影響を受けているとみられる者は補助を申請できる。」ボードは神経内科医（1名）に依頼して申請者を所定の神経症状査定表に基づいて審査する。大人用査定表の項目は、振戦、失調、共同運動障害、構音障害、反射減退、感覚障害、視野狭窄で、それぞれの症状がより重度で顕著な程高い点をつけ、合計得点が一定以上で補助（年金）の対象となり、年金受領はボードメンバーが決議する。但し査定担当神経内科医師は決議に参加しない。点数が高い程、金額が高い。年金額は月額で最低250ドルから最高800ドルまでで終身権である。ボードメンバーは委員長、両居留地からそれぞれ住民代表1名ずつ、一般医師2名、連邦政府代表1名、州政府代表1名の計7名で構成されている。特に居留地代表は申請者の日常生活を報告して決議に反映させると聞く。2006年末時点で受給者数は大人297名（申請者735名）、子供23名（申請者60名）である。(Mercury Disability Board, Cosway, Sylvia, 2001)

ボードの補助額は一時金無し¹⁰⁾、補助年金月額250ドル（約2万5000円）から800ドル（約8万円）だから、日本の行政によって水俣病に「認定」された場合の慰謝料（一時金）1600～1800万円と終身特別調整手当（年金）月額7～17万円程度とは比べるべくもなく安い。

15. 水銀値検査

1996年カナダ政府ヘルス省は1971年以来25年間続けてきた毎年春と秋の水銀値検査を終了した。そして以下のように結論した。「現在の研究水準とカナダの先住民の水銀値からすれ

ばメチル水銀が、成人の健康に直接被害を及ぼす可能性は現在のところ最小限というのが合理的である。」(Health Canada. Medical Services Branch、1999、pp.23)

16. 2002年検診

ヘルス省が毎年の水銀値検査を終了してから6年後の2002年に原田医師と藤野紘医師はグラッシーナロウズを再び訪れた。27年の歳月が流れていた。和解交渉時に弱冠20歳で酋長だったサイモン・フォビスターが22年ぶりに酋長に返り咲いていた。私はこの時、初めて原田正純先生にお会いした。両医師とも夫婦連れで、加えて若いアシスタントの寄田克彦氏と熊本日日新聞の農孝生記者の6人のチームだった。2002年にはホワイトドッグとは連絡が通じずグラッシーナロウズの検診のみ実現できた。

27年ぶりの原田医師のカナダ再訪問はウィニペグ・フリープレス新聞やケノラ・デイリー・マイナー・アンド・ニュース新聞等に掲載された。

見出し「水銀中毒医再訪問 グラッシーナロウズの1975年以降のフォローアップ」

日本の神経内科医原田医師は1975年にグラッシーを訪問し、住民のひきつけ、めまい、視野障害、重症の生まれつきの障害の原因は水銀中毒か水俣病だと結論した。30年後の今でも中毒が続いているか調べにきた。(略) 1975年の訪問時に原田医師は州政府に長期水銀汚染について警告した。一方、州ヘルス庁担当官は一部の住民に高い水銀値がみられるが、健康障害の徴候はない。住民はいまだに同河から魚を獲り食べ続けていると述べた。

(Winnipeg Free Press, September 3, 2002)

17. 水銀障害ボードとの会合

グラッシーナロウズでの検診を終えてウィニペグに戻ったところで、水銀障害ボードとの会合をもった。ボード側参加者は、ボード委員長マイケル・ハーディ、設立時以来の委員で医師のブライアン・ポスタル、ボードのために申請者査定をする神経内科医師ブライアン・シュミット、当方は原田、藤野両医師と農記者、寄田氏と私だった。

始めに今回の検診の印象を特に1975年当時と比べてどうかと聞かれ、原田医師が答えて「27年前には毛髪水銀値が高めだったのに症状が軽かったのに比べ、今回の水銀値はラボの結果がでるまで分からないが、症状は進行していて、より典型的になってる」と述べた。その後、ボード側が設立経緯と委員会構成メンバー、活動史、申請手続きから査定、年金支払い等について一通りの説明がされた。さらに症状査定の難しさ等日本とカナダの事情を説明しあった。

ボードは補助年金受給者を水俣病とは認めていないという。神経症状の原因が水銀か他の原因か区別し難いというのが理由だ。しかし査定項目の神経症状があれば原因を問わずに補

助年金対象にするという。そのことによって政府は水銀に中毒した患者が何人発生したかを発表しないで済んでいると言うのだ。

「カナダの医学会は症状の原因が水銀なのか他のものなのかについてどう考えているのか？」と原田医師が質問したのに答えてシュミット医師との会話になった。学会の意見は統計をとってないので答えられないとの事だったが、彼自身の意見では「自分は500人近くの申請者を診たが、95ないし98%は水銀以外の原因で説明できる」とのことだった。

水銀毒の影響を抽出するために、アルコール中毒や糖尿病患者が同率で発生していて同じぐらいの人口の対照地区をさがして比較コントロール調査が必要だが、まだ実現したことはないとも言った。自分はウィニペグで（水銀に汚染されていない*筆者）先住民の患者をみるが、振戦や感覚障害、歩行障害等神経症状の頻度はグラッシーやホワイトドッグと同じという印象だ。口周辺の感覚障害はまれだ。それは一つに糖尿病が原因だからと考えられる。先住民に特に高率で発生しているからだ。」原田医師は「それについての報告書はあるか？疫学調査はしたのか？」と聞いたが答えはノーだった。それでもシュミット医師はさらに続けて「汚染ピーク時に魚を食べた世代の症状と同じ症状が、ピーク時以降に生まれた世代にもみられる理由として、継続する長期微量水銀被曝によるものだともいえるが、同時に、何か他の原因があるともいえる。シンナー遊びなどは先住民の若い世代にひろまっているので、それが原因だとも考えられる。」

また「貧困状態におかれている申請者が査定診断を受ける際、年金受給のためにうそをつくことがあり得る。」さらに「金を個人に授与するのは問題だと思う。その金でかえって酒が買えるようなケースを幾つもみてきた。」

シュミット医師は「自分は二点識別法を使って診たり、靴下手袋状と口周辺の感覚障害に注意して診ても、アルコールやシンナーの中毒症状や糖尿病と水銀中毒症状の区別をつけるのは不可能だと思う」と述べた。原田医師は「感覚障害の頻度ではなくパターンに特徴がある」と返答した。

さらに中枢神経性か末梢神経性か、その混合かについて意見交換した。それに関連して査定項目の反射減退について、メチル水銀中毒の場合は末梢神経が損傷されず反射亢進が多くみられることを原田医師が述べると、シュミット医師はやや驚いた様子だった。シュミット医師は中枢神経は勿論だが末梢神経の損傷も否定できないという立場だった。

反射減退を査定項目に入れていることで糖尿病患者をより多くひろっている可能性があるかもしれないという点では同意した。原田医師は「アルコール中毒は日本ではそれほど問題ではない。」と最後に加えた。

18. TV ニュース

同日、原田、藤野両医師はCBCテレビのインタビューを受けた。CBCはさらにグラッシーナロウズの酋長、住民等のインタビューも加えて“The National”で放送した。

(ニュースのホストが始めに)「30年間、毒とともに生活するとはどんな気持ちでしょう。世界的エキスパートによる今回の調査結果は不安を掻き立てるばかりです。」住民は今でも魚を食べてますが、どれほど食べるかについては注意しています。上流の製紙工場がこの先住民居留地の河に水銀を大量に放流したからです。住民のスティープはガイドとして働いてたころ大量に魚を食べました。今では筋力も弱まり、口がもつれ、飲み込みが不自由ですが、水銀のせいかどうか知りたいといいます。

日本から来た2人のエキスパートのため、この問題が再燃しています。原田医師は1975年にカナダを訪れた水銀中毒調査団の一員でした。その時の調査で水銀中毒が広まっている事が判明しましたが調査は完了したわけではありませんでした。(画面；今回2002年検診の診断書の山に目を通す原田医師と毛髪サンプルを示す藤野医師)今回は約60名を検診しました。「(原田医師が英語で)何人かは典型的な症例でした。」全体の7割から8割に何らかの症状がみられました。ある8歳の子は病気を持って生まれてきたのではないかと疑われています。「(原田医師が英語で)母親が魚を食べた。そして水銀が胎盤を通過して胎児に行ったんです。」

酋長のサイモンはカナダ政府ヘルス省に住民全体の包括的検査をするよう要請した。ヘルス省は毎年行なってきた検査を現在は中止している。ヘルス省のポール・ストロバックが原田医師等の調査結果に関心があると言った。最後にスティープが、「これが白人の住む都市で起きたなら全く違う対応だったに違いない。これは環境人種差別なんです。」と抗議した。(CBCTV ニュース “The National”、2002年9月23日放送)¹¹⁾

19. 2002年検診報告論文

両医師の帰国後しばらくして原田医師から2002年報告論文の日本語版がカナダの私のもとに届いた。グラッシーに検診結果を知らせるために取り合えず私が英語抄訳版を作成して、検診の翌2003年にグラッシーナロウズに提出した。個人ごとの診断結果は、それぞれ密封してグラッシーの元酋長ビル・フォビスターに直接本人に手渡してもらった。最も多い反応は、自分は水銀障害ボードに棄却されたが、それをくつがえすために原田先生の検診結果を使えないだろうかという質問だった。同時に原田検診調査団の検診方法を身を以て体験した住民が水銀障害ボードのそれと比べ、はるかに詳細かつ包括的であり、従って信頼性も高いはずだと言うのを多々耳にした。

英語抄訳版を読んだ副酋長のスティープ・フォビスターが早速、新聞記者に連絡して取材させた。以下、記事の要約である。

見出し「水銀の脅威悪化？ 30年経た今でも居留地の健康問題が継続している事を発見」
受診者約60名のうち約70%に神経症状がみられた。75年と2002年の両方の検診を受けた9名のうち8名に症状の進行がみられた。ヘルス省の専門家ポール・ストロバックのコメント

「当省としては1999年に問題は終了したと考えている。水銀値は下がり住民の関心は薄れた。でも原田医師の検診で再燃した。」

メギル大学のローリー・チャン中毒学教授がカナダ政府ヘルス省の助成金でグラッシーの副酋長スティーブ・フォビスターとホワイトドッグの協力を得て両居留地の魚や野生動物の水銀値を調査中である。(Winnipeg Free Press, July 23, 2003)

20. 魚安全宣言？

翌2004年8月に再び原田医師のカナダ検診が実現するのだが、その直前の6月にメギル大学のローリー・チャン教授の水銀値調査結果が発表された。

見出し「毒性学教授 ケノラの魚安全宣言」

メギル大学毒性学のチャン教授が両居留地の水銀値は70年代に比べ著しく（50%から500%）低下しているのでポテトチップを食べるくらいなら魚を食べた方が良いぐらいだと述べた。工場直下のクレイ湖の魚はまだ水銀値が高いので食べられない。1975年に原田医師が住民の水銀中毒の症状を発見した。グラッシーとホワイトドッグ住民は見解の違いに戸惑っている。(Winnipeg Free Press, June 25, 2004)

チャン教授は、魚や野生動物の水銀値が「安全基準」より高いから危険で、低いから安全だという。カナダ政府ヘルス省の専門家ポール・ストロバックも人間の水銀値が「安全基準」より低いから問題ないと述べているだけである。では「安全基準」以下ならいくら長期に渡り食べ続けても発症しないのか、あるいは摂取が長期に渡れば害をもたらすのかどうか問題だ。なぜなら「安全基準」以下であっても水俣病の症状を呈している住民患者を実際に検診でみてきているからだ。この「安全基準」を見直すべきだというのが原田医師の主張だ。

日本側がつくった2002年報告論文完訳を2004年に再びカナダを訪れた際にグラッシーに渡した¹²⁾。

21. 2004年検診

2004年8月に原田医師は四度目の検診訪問を行った。8月に入ると、ケノラの地元新聞に原田医師の再訪問についての記事が街への通知でもあるかのように掲載された。

「水銀エキスパート・グラッシーナロウズ再訪問」という見出しで、国際的に認められた原田医師が5人の医師とともに、8月27日から9月5日にかけて再訪問すると伝えられた。

今回は原田医師に加えて、3人の医師（藤野紘、鶴田和仁、福原明）、2人の熊本学園大学水俣学研究センター教授（花田昌宣、宮北隆志）、3人の大学院生（荒木千史、田尻雅美、永野いつ香）、さらに助手として鶴田医師の子息の総勢11人と日本で調査文筆活動をしている

カナダ人アン・マクドナルドとボランティアのカナダ人2人、在カナダ日本人1人が加わって検診と調査を行った。1975年の日本訪問団の一員だった元酋長ビル・フォビスターが居留地内の家屋を2棟空けて調査団の滞在と自炊に使わせてくれた。この詳しい報告は「長期経過後のカナダ先住民地区における水銀汚染の影響調査（1975-2004）」と題して『環境と公害』2005年・第34巻第4号に掲載された。

この検診調査中にトロント・スター新聞からフリーの記者ケイト・ハリスが取材に訪れたので協力するとともに2002年検診報告論文英語完訳版を渡した。記事では原田医師をはじめとする検診調査団が以下のように紹介された。

水銀汚染の日本人専門家は、カナダにとってオンタリオ北西部の河川の水銀レベルは下がっているからとのんきでいるのは危険だという。原田医師は今回公表した報告論文で、血中あるいは毛髪の水銀値が低いからと言って、その人が水銀中毒になっていないとは必ずしも言えないと述べた。原田医師は10人を率いてカナダに1週間滞在しグラッシーナロウズとホワイトドッグの住民を検診した。両居留地は1970年の何年も前からドライデンの製紙工場が流し続けた大量の水銀の被害にさらされた。原田医師によれば、2002年に診た住民の中で1975年にも診ていた9人の同住民が、75年当時には症状がなかったにもかかわらず2年前の2002年に診た時には、水俣病の古典的症状を顕示していたという。

同9人には部分的麻痺と痴呆、起立困難、構音障害がみられながらも毛髪水銀値は安全基準以下だったと、この報告論文に記されている。

長期にわたって水銀毒にさらされた場合、「たとえ安全基準を越えなかったとしても慢性水俣病は生じ得る」と結論している。

カナダでは両居留地で水俣病発生が認知されたことはない。

さらに原田医師の報告書は胎児性水俣病が起きたかどうかについて決定するにはさらに詳しい調査が必要であり、また故人も含めた疫学調査の必要性も付け加えた。

藤野紘医師との共著によるこの報告論文は、2002年の追跡検診57名を基にしている。

精神神経科医で熊本学園大学社会福祉学部教授の原田医師によれば、対照グループとの比較データが欠けているとの理由で環境調査専門誌掲載を一旦は断られたそう¹³⁾。

報告論文はカナダ政府ヘルス省とオンタリオ州政府が水銀値は人間、環境ともに下降し続けていることを証拠として汚染は終わりに近づいているとの見解であることを原田医師は認識しているという。

ヘルス省のキャサリン・サンダースに電話取材したところ、この中間レポートともいえる2002年の追跡検診報告書に対して、「類似の臨床症状を示しながらも異なる可能性のある原因をどのように診断区分したかについて書かれていない。例えばアルコール依存症や糖尿病、多発性硬化症やパーキンソン病は、水銀中毒による症状と似た症状、ぼやけた視界、バランス障害、構音障害を伴う。」

「勿論、区分するのは大変困難だけど、それを研究解明するのがカナダの研究者の仕事で

しょう」と原田医師は言いながら現在、低レベルの水銀汚染は世界にひろがっているにもかかわらず人間への影響についての理解は不十分だと指摘する。

彼はさらに、環境病の性質として、中毒被害者の中には様々な病気を持つ人達がいるわけだから、例えば糖尿病と水俣病が複雑にからんだ症状を示す事になると言う。

サンダースは、政府としては引き続き水銀問題に関する調査研究を助成していく、その一つのメギル大学の研究では魚の水銀値低下を認め、今ではホワイティッシュなら居留地先住民が食べても安全だと結論していると言う。

グラッシーナロウズの副酋長スティーブ・フォビスターが言うには、ヘルス省が先住民の心配を考慮しないだけに住民はさらに日本チームが気にかけてきてくれたことに感謝しているとのことだ。

レイチェル・スコット（30歳）は学習障害を持つ12歳の息子シェルダンを日本から来た医者に診てもらいに連れてきて「日本チームが来てくれてうれしい。少なくとも誰かが私達を助けてくれている。」もう一人の息子は脳性麻痺症だという。レイチェルは3人の息子のうち2人に発達遅延があるのは妊娠中に自分が水銀を摂取したためではないかと恐れる。「その恐れについて数々の医者に聞きましたが答えは得られませんでした」と言う。

(Toronto Star, August 30, 2004)

22. 類似症状他疾患との区別

以上この記事は、2002年報告書英語版をふまえて原田医師の見解を良く紹介していると思うが、カナダ政府ヘルス省もどこで手に入れたのか報告書に対し反撃している点に気付く。類似症状を呈する他疾患との区別についてだが、現実には糖尿病と水銀中毒を併発していたり、アルコールに、かつ水銀にも中毒している人があるわけで、他の病気との区別が困難なのは原田医師も1975年の検診報告論文でふれていた。

「振戦は微細な手指の振戦が21例にみられた。うち、3例はパーキンソニズムと診断できる。このうち、微細な手指振戦はアルコール中毒でもみられるので決め手にはならない¹⁴⁾。」「この神経症状の全てがメチル水銀に起因するとはいえない。他の病気からくる神経症状と注意深く判別しなければならない。しかし水俣病に頻繁にみられる症状＝知覚障害、聴覚障害、視野狭窄、震え、失調がすぐに確認された¹⁵⁾。』

類似した感覚障害でもその人の生活環境や食生活、家族の症状など疫学的情報を考え合わせることによって原田医師は診断する。原田医師が患者の生活現場にでかけていって診るのもそのためだ。そうやって現場に出て調査研究を重ねることで前代未聞のカナダオンタリオ水俣病像を抽出していくのが、カナダの研究者の仕事だと原田医師は言っているのだ。それもしない自分達の無為¹⁶⁾を棚に上げ、神経症状はあたかも水銀以外の他の原因かもしれないということばかり言うのは、水銀要因の印象を薄めるねらいがあるからだろう。では糖尿病でもない、酒も飲まない、しかも魚が大好物だと言う人に典型的な水俣病症状が顕われてい

る場合についてサンダースは水銀の他に何のせいにするのだろうか。私が記録映画で取り上げたトム・ペイアシュはコミュニティーの誰に聞いても酒を飲まないというが、原田医師の検診結果では典型的な水俣病像を呈しているのだ。

続いてケノラ・デイリー・マイナー・アンド・ニュース新聞にも9月1日付けでまたヘルス省のキャサリン・サンダースのインタビューが載った。彼女はこの記事では、25年分の住民水銀値検査（1971-96）では魚および当該地域の住民の水銀値が確実に下降してきている点を指摘した。また先住民自身が選んだ研究者に調査を依頼できる制度もあり、メギル大学の調査もその一つであると述べた。この記事でもサンダースは相変わらず原田医師が他の原因との区別をしていないと言った。

23. 症状と水銀のリンク ヘルス省認める

翌2日付けの同新聞に今度はロイ・クイワトコスキーというヘルス省の先住民およびインディアンヘルス課長の談話が載った。今回は一転して原田医師の仕事には一切触れる事なく、「カナダ政府はグラッシーナロウズとホワイトドッグでみられる神経症状が水銀とリンクしていることを否定しません」というものだった。「症状が悪化している可能性も認めます」と言う。しかし、魚と住民の水銀値は下がってきていることを再度、強調した。そして水銀の影響を心配する人は、水銀障害ボードに申請するように強く勧めた。彼は、ボードが1985年以来、両居留地の住民で申請して症状を認められた人に支払った補助年金は通算で900万ドル（約9億円）になることを述べた。

ヘルス省が18万5000ドル（約1850万円）出資した前述のメギル大の調査では、ホワイトフィッシュなら症状のある人でも摂食可能であると結論されている点を指摘した。

つまり症状が水銀を原因とすることも進行悪化していることも認めるというのだ。それでも水俣病が発生したとはいわない。その論理は前述のヘルス省の1979年見解にあるようにカナダで発生しているのは軽い水銀中毒であり、水俣病はあくまでハンター・ラッセル症候群をともなった重い神経症状群であるという事である。

24. ロチェスター大学マイヤーズの見解

さらに数日後の新聞にアメリカのロチェスター大学の水銀中毒の専門家ギャリー・マイヤーズ神経内科医師のインタビュー記事が載った。

見出し「マイヤーズが水銀問題を濁す」

アメリカのロチェスター大学の水銀の専門家ギャリー・マイヤーズ神経内科医師が、自分の結論は日本の同業者の結論と違うかもしれない、先週グラッシーナロウズとホワイトドッグを訪問したが住民のどの症状が完全に水銀に起因し他の原因がないか確定するのは困難だ

と言った。複雑な問題だという。

水俣病とケネディー症候群の間には類似点がある一方、大事な相違点もあるとマイヤーズはいう。彼は以前、グラッシーとホワイトドッグを訪ねたことがあり、現在、ニューヨーク州北部の大学の小児神経内科に勤務している。彼はまたインド洋のセーシェル諸島で1990年代中頃、住民に症状がではじめた時から調べている。このケースがユニークなのは、水銀の長期微量被曝であって、日本の水俣湾やさらにはウィニペグ河¹⁷⁾のようにより高いレベルの水銀ではない点である。マイヤーズは水俣湾の状況はさらに特異だという。なぜなら水銀とともに複数の金属が高レベルで関与しているからだ。プロセスも違っている。付け加えて、日本の水俣の工場は35年間に渡り80から200トンの水銀を破棄したということだが、ドライデンの場合は10年間に10トンである。

しかしながら、彼は居留地住民が、河から獲れた魚を食べることによって高レベルの水銀に被曝するという前提は否定しない。ホワイトドッグとグラッシーナロウズの住民が高い水銀値を示すのは明らかだ。

マイヤーズは患者の症状と水銀値の間に相互関係はないと強調する。症状を発する時の水銀値は誰にもわからない。彼にも水銀値が幾つになったら症状が出始めるか分らない。メギル大学の調査で最近グラッシーとホワイトドッグの付近で獲れた魚が安全だという研究¹⁸⁾に同意はするものの、マイヤーズが日本を訪ねた時に聞いた話では、妊娠中に水銀で汚染された魚を食べて胎児性水俣病の子を産んだ女性が、次の妊娠中には魚を絶ったところ健全な子を産んだという。

彼は両居留地で全面的調査の必要性を提唱した。なぜなら筋側索硬化症やケネディー症候群という、環境ではなく遺伝子に関わる病気の発生が増加してると見えるからだ。これらは神経症状をもたらす他の原因となる。両居留地に関してもっと科学的調査が必要だ。

(Kenora Daily Miner & News, September 13, 2004)

今度は顕在する神経症状が水銀以外の原因も加わっているかどうか判断するのはむずかしいという意見だが、ヘルス省の水銀以外の原因で生じた症状との区別法を提示せよという意見と同じである。また水銀に対する忍耐の個体差や摂取時と発症時のタイムラグについて言っている。しかし問題は住民に見られる神経症状に水銀が原因関与しているかどうかであり、水銀以外の原因も関与しているかどうかではない。水銀以外の原因も関与していることが判明したところで水銀に中毒していないことの証明にはならない。現にマイヤーズは「居留地住民が、河から獲れた魚を食べることが高レベルの水銀に被曝するという前提は否定しない」と言っているではないか。記事には、マイヤーズが先週、両居留地を訪問したとあるが、我々がホワイトドッグで検診をしている様子を1時間ほど見ただけで帰って行ったというのが事実だ。

25. ヘルス省、症状の原因が水銀であることを認める

マイヤーズの記事掲載と同日、注目すべき記事が、町のもう一つの新聞ケノラ・エンタープライズに掲載された。再びカナダ政府ヘルス省先住民およびイヌイットヘルス課長のロイ・クイワトコスキーの談話である。クイワトコスキーはの中で「たとえ野生動物や人間の水銀値が下降しても症状が進行しているかもしれないことは認める。症状の原因が水銀であることも認める」と語った。これはヘルス省の担当者が両居留地住民のメチル水銀人体被害を認めた発言として重視できる。

しかし以下のことを付け加えるのも忘れてはいなかった。「水銀障害ボードは1985年以来通算900万ドル（約9億円）の補助金を授与している。申請者はその病気の症状さえ呈していればよい。ボードとしては他に可能性のある原因、パーキンソン病や糖尿病、アルコール中毒などによる症状をあえて除外する意図はない。」つまり現状では、神経症状のどこまでが水銀で、どこまでが他原因によるか分からないので、症状のある者すべて含めて補助金対象とするというのだ。ただこれによって前述の通り、政府は逆に水俣病患者かどうかの判断を免れ、水俣病患者と認めた件数の発表も免れた事になる。ヘルス省のクイワトコスキーはさらに加えた。「補償問題になるといつでも金額が低過ぎるという人々はいるものです。」つまり被害者と加害者との間に和解が成立し和解金が授受され問題は解決済みだということである。現行の解決策の枠組み内で行動しろと言っているのだ。これが和解受諾の代償といえる。

26. 記者会見 2004

両居留地での検診が終わってウィニペグで原田医師の記者会見が行われた。両酋長と第三条約¹⁹⁾事務所からグランドチーフと健康問題担当者が同席した。席上、原田医師は、妊婦は魚摂食に注意しなければならない事と、それはグラッシーやホワイトドッグだけでなく世界の他の地域でも言えることだと述べた。原田医師は2002年に住民から採取した毛髪の水銀値が低かったことを述べ、水銀が最終的には体外に排出され水銀値が下がるとはいえ、水銀が体内通過中に起こしたダメージは治るわけではなく悪化すると説明した。ホワイトドッグやグラッシーで獲れた魚を、旅行者や居留地住民でも汚染が下がってから生まれて、水銀の影響を受けていない人々が少量食べるぶんには問題ないが、症状をもつ住人が食べ続けるのは危険であると言った。

この記者会見で両居留地と第三条約事務所は連帯して、カナダ連邦政府とオンタリオ州政府に両居留地の環境汚染のインパクトについて政府審問調査をするよう要請した。

しかし、5日後の9月8日付のケノラ・デイリー・アンド・マイナー・ニュース新聞に「ヘルス省のスポークスマンが、現時点ではさらなる調査の予定はないと言った」とあり、先住民の要請はかなえられないことが公にされた。

落胆している余裕もなく、私にできる事は、原田医師の発見したことを居留地の一人一人

に伝えることだと思った。それには2004年検診報告書ができたなら英訳して居留地住民に配布することは勿論だが、2004年の検診はビデオでも記録しておいたので、伝える手段として映画もつくることにした。その撮影素材の編集を始めた。一方、グラッシーの人々は森林皆伐に反対する活動を継続していた。

27. 熊本・水俣訪問（2005－2009）

2005年には熊本学園大学水俣学研究センターの招きで、両居留地からひとりずつ代表して熊本、水俣を訪れた。これまでの検診調査チームの受け入れ態勢作りに尽力したビル・フォビスター（グラッシー元首長／居留地学校理事長）とアンソニー・ヘンリー（ホワイトドッグ助役）に付き添いの私が加わって行った。この2人は1975年の水俣訪問者なので患者さんとの再会を楽しんだ。さらに資料館や研究施設などの見学もした。

2006年には同センターが主催した「環境被害に関する国際フォーラム～水俣50年の教訓は活かされたか」に招かれてカナダから、ガブリエル・フォビスター（水銀障害ボード・グラッシー代表委員）とアンソニー・ヘンリー、ステファン・ペイスン（ボードの査定神経内科医、シュミット医師の後任）と私が日本に行った。開会直前に健康を害された原田医師とは病床で再会することとなった。

28. 2004年検診報告論文

その後、2004年検診報告論文は、『環境と公害』2005年4月・第34巻第4号に「長期経過後のカナダ先住民地区における水銀汚染の影響調査（1975－2004）」と題して発表された。それを英訳し“Long-term study on the effects of mercury contamination on two indigenous communities in Canada(1975－2004)”として両居留地と水銀障害ボードに配布した。

その頃、居留地住民の間で水銀障害ボードの査定基準の見直しをせまる意見が高まってきたことをグラッシー代表委員ガブリエルから聞いた。原田検診調査チームの効果がじわじわでてきたと実感した。続いて水銀障害ボードから私に連絡があり、日本における水俣病認定審査の変遷を教えてほしいとの要請があったので私が作成して送った。ボードが査定基準の見直しを開始したサインとみられた。

2004年の原田医師の検診活動に関する撮影素材の編集は、2009年に『The Scars of Mercury』と題して完成し、プラネット・イン・フォーカス・トロント環境フィルム＆ビデオフェスティバルの正式参加作品に選ばれ、秋のトロントでプレミア上映が行われた。同時に同映画DVD版をグラッシーの各家庭合計200軒ほどに無料配布した。ホワイトドッグでは上映会をした後、質疑応答した。

29. 最後の検診

翌2010年3月末に再び検診調査を行うことになった。これが最終になるということだったので両居留地にその旨伝えた。チームメンバーは原田医師を筆頭に花田昌宣、田尻雅美、井上ゆかり、堀田宣之、藤野紘、高岡滋、上田啓司、原田寿美子に加えて熊本県民テレビのディレクターとカメラマン、さらにカナダ在住日本人が通訳として3人、カナダ人ドライバーが2人の計16人だった。2006年に日本を訪れたガブリエル・フォビスターが自分の家と娘の家族の家を明け渡して我々の滞在に使わせてくれた。

原田医師がウィニペグに到着してから、居留地へ発つまでの準備期間中にCBCラジオの取材が行われた。その内容を以下要約する。

(始めにオンタリオ水銀汚染の経緯と水俣病および原田医師の関わりについての説明をした後) 原田医師がオンタリオ州北西で発見したものは、水俣の重症患者ほどひどくはないですが、はっきりとした症状が先住民にみられるとのこと。「(原田医師の声で) sensory disturbances and construction of visual field, impaired hearing & speech, incoordination」原田医師によれば水銀汚染は工場汚染廃水だけでなく、採鉱、石炭火力発電、大規模焼却炉などからの水銀放出も加わって世界的な問題になっていると言います。こうして水銀を蓄積した魚を食べることで人間がおかされます。今は長期微量汚染の危険を懸念しています。例えば胎児が心配です。また行儀を習得できない子や自閉症、知的学習障害などもそうです。ただ魚は大変栄養のある良い食物であることは事実だと原田医師は言います。アメリカの食物薬品委員会は水銀値が高い魚をウェブサイトに掲載しています。最後にホストに「あなたは魚を食べますか？」と聞かれて「僕は好きですねー」と答え、さらに「家族も同様です」と続けてホストを驚かせた。付け加えて「多分、水俣病が起きたために日本の魚の安全基準は世界のなかでも厳しい方なので安全です。」

(CBC Radio “Information Radio”、March 2010)

ラジオ取材を撮影していた県民テレビが番組ホストのテリー・マクロードに原田医師についてどう思うかとカメラを向けて聞いたところ「カナダで水銀中毒に苦しんでいる人々を助けにきてくださって本当に感謝しています」という答えだった。

すぐに地元紙ケノラ・デیلیー・マイナー・アンド・ニュースが、「マーキュリー・エクスパート・リターンズ」という見出しで日本チームの来訪予定を知らせた。

今回はグラッシー検診とホワイトドッグ検診の間にケノラ市に一日滞在して、原田医師の講演と『The Scars of Mercury』の上映をする計画であることも記事に載っていた。ケノラ市は両居留地に最も近い町で、観光業や伐採業、製紙業で成り立つため、水銀問題を過小評価したい基盤があり、伐採も推進派が多い。水銀問題や伐採反対の声をあげる先住民と基本的に対立しているだけに市民の反感を危惧したが、上映当日はケノラでも先住民の苦境に理

解を示そうとする人々が集まったようで混乱はなかった。

そのすぐ後の2010年4月6日に、2004年検診報告論文の英語版一般初公開と銘打ってトロントで記者会見を主催した。トロントに本拠をもつ環境団体アースルーツのデヴィッド・ソーンの協力を得て、グラッシーの先住民活動家ジュディー・ダ・シルバがオーガナイズし、酋長サイモン・フォビスターが参席した。続いて翌日、グラッシーからバスでつめかけた住民達にアムネスティーインターナショナルやグリーンピースや労働組合の面々を含めた支援者達が加わってトロントの街を抗議デモした。その際、皆が青色に染めた10メートル程の布を複数揚げ持ち河に見立てた。各テレビ局、ラジオ局、および数々の新聞による報道が行われた。どう報道されたか新聞をいくつかみてみよう。

まずCBC ニュースで、水銀障害ボードの査定項目の検討が始まっているかもしれないことが分かる。

原田医師の報告論文英語版公表記者会見に参加したグラッシーナロウズの住民は、原田医師が水銀に侵されていると言う人々のうち、水銀障害ボードの補助金を受けているのは半分以上であると言った。(略) ボードは特別な基金から水銀で健康を害された人々へ補助金を支払っている。ボードは査定のための独自の基準を持っていると委員長のマーガレット・ワンリンは言った。「人々が日常生活をしていく能力、それが狩猟でも魚釣り、もしくは手工芸品作り、あるいは生活上の雑用をする能力であったとしても、それが水銀によってどれほどインパクトを受けているか。」「だから本当に障害の度合いを計るわけで、時がたつにつれその度合いが進行することも我々は認識しています。だから2年以上経った後に神経症状査定を再度受けることができます。」(略) 原田医師が2004年に再度グラッシーナロウズに戻ってきた時には、1975年検診時にカナダ政府ヘルス省安全値より高い水銀値を示していた住民のうち43%が死んでいたと環境団体アースルーツのソーンが記者会見で述べた。彼によれば、たとえカナダ政府ヘルス省安全値以下の人でも水銀による健康問題をもっている。原田医師と検診調査チームが2004年に診たグラッシーとホワイトドッグの156名のうち89%が、水俣病もしくは「水俣病合併症」、「水俣病疑い」であることが分かった。グラッシーの住人は、カナダ政府ヘルス省が1996年に住民の水銀値が安全値以下になったという理由で水銀値検査を廃止したと言う。(略) ワンリンは、往々にして老化のサインと水銀中毒は見分け難いと言う。彼女はまた現在、ボードは運用上の変更が必要であるかどうかについて国際的に水銀について調査をしていると加えた。

(CBC News “Mercury still plagues Ont. First Nation: report”、April 6, 2010)

マイヤーズ医師はグローブ・アンド・メールに再び登場した。

ロチェスター大学のギャリー・マイヤーズ神経内科医は、「それぞれの症状と水銀中毒を結びつけるのは決して単純明快ではない」と言う。住民が危険なレベルの毒に曝されている

ことはマイヤーズにとっても間違いない事実だが、症状の原因を特定するのは困難であるという。

「今回のような事件の中で一つの難点は、それらの症状は 実際の被曝と常に特定のに対応してはいない」と彼は言う。「解釈によるところが大であり、多くの場合、それは検診医による解釈で、一時的な対応関係があるかないかである。」

(Globe and Mail “Decades-old mercury poisoning shown to have lasting effect on native community”, April 6, 2010)

マイヤーズはここに及んで、原田医師の判断を恣意的だと言っているのである。再び疫学的情報を考慮することを怠っているし、水銀の影響を否定することにもならない。単に原因を曖昧にする効果だけだ。

CTV ニュースには、オンタリオ州知事のコメントが以下のように伝えられた。

ピッツバーグでのイベントに参加中のマッグインティ知事は報告書について聞かれて、読むまで何も決定しないと答えた。「この報告書は明らかに問題が継続中であると言いますが、これは連邦政府が言うところの、汚染状態はコントロールできているという報告と対照的です。」(略)「私が察するに、私達はもう決して1960年代や70年代にしたように湖や河を汚染しないと社会として学びました。だからそのような汚染は止めたわけです。」「問題は私達の水系に留まる水銀の継続的毒作用です。魚に集積し、コミュニティはそれを食べています。」「私達に課せられているのは、この新しい報告書の言わんとする所を時間をかけて良く検討することです。」

(CTV News “McGuinty to review mercury report before acting”, April 6, 2010)

その後オンタリオ州知事に加えて州庁の大臣達が述べたコメントが以下のように掲載された。

オンタリオ州アボリジナル庁のスポークスマン・グレッグ・フラッドは、報告書を検討すると確認した。「我々はオンタリオ州民全ての健康を真剣に考慮している。そう言う意味で、この報告書を受理次第、正当な調査検討を行うのを楽しみにしている。カナダ政府ヘルス省のスポークスマン・クリステレ・リガルトもこの報告書を検討すると言った。内容に関するコメントはまだできない。しかしカナダ政府ヘルス省のスポークスマンは、現在、当省は最も抵抗力の弱い集団、妊婦、妊娠可能性の高い年代の女性と子供のために新しい安全基準を作成中だと確認した。

(Montreal Gazette “Mercury poisoning lingers decades after Ontario river deemed safe”, April 7, 2010)

「安全基準を見直せ！」という原田医師の声が届いたといえた。

原田医師は以前、外国の自分達にできることは検診までで、それを使うのはその国の当事者の人たちだと言われていた。グラッシーの人たちは、使うどころか、そもそもこの2004年検診報告論文があったからこそ記者会見とデモ行進を行ったのだ。12年前の1999年に私が初めてグラッシーナロウズを訪れた時に感じた「諦めた感じ」からは隔世の感がある。

前述のヘルス省先住民およびイヌイットヘルス課長クイワトコスキーが「たとえ野生動物や人間の水銀値が下降しても症状が進行してるかもしれないことは認める。症状の原因が水銀であることも認める」と公表したのは、何よりも先住民が検診報告論文を使って社会に訴え、それがカナダのメディアに報じられたからで、でなければ依然としてヘルス省の専門家ポール・ストロバックのコメント通り「当省としては1999年に問題は終了したと考えている。水銀値は下がり住民の関心は薄れた」ままであっただろう。

私は原田先生にこう申し上げたことがあった。「原田先生はカナダ政府に煙たがられていますよ。」私はそう言いながら、原田先生は日本では実際に裁判で証言されてきたことを思い、こう付け加えた。「まあカナダに限ったことでもないでしょうけど。」原田先生は次のように返答された。「ええ、私は幸せ者です。」

まとめに替えて：原田仮説

カナダ政府は、かつての汚染ピーク時には「安全基準」以上の水銀値を示す住人がいても、症状が無いとか、典型的に揃っていない軽症という理由で、水俣病は認めず、軽い水銀中毒の可能性のみ認めてきた。軽いどころかトーマス・ストロングのように死亡したケースでも、水銀は介在していないとした。その後、汚染下降時には、たとえ神経症状が揃っていてもなおかつ長期に渡って水銀汚染魚を食べてきた疫学的条件が揃っていても健康に対するリスクはないとしてきた。個人水銀値が「安全基準」以下だからという理由だ。

ご存知のように原田医師は、この水銀値が高い時には発病せず、下がってから発病する慢性化した病状を説明する仮説を30年以上前に書いている。

「発病はある時期の体内蓄積量でなく、体内侵入量と時間との積になる。このように考えた方が現実になれわれの前に存在する患者の発症の説明には合理的に思える。すなわち、ある閾値に達しなければどれだけ体内を通過しようと全く影響がないという考え方は、メチル水銀などの排泄されにくく破壊されにくい物質では理解できない。これはあくまで一つの仮説であって将来、実験的にも立証されねばならないだろう。」

(原田正純、1979、pp.316)

つまり水銀が体内を通過する度に細胞を壊していくとすれば、長期に渡って水銀汚染魚を食べ続けた結果、壊された細胞の数が増え続け、ついには発病する数に達するという仮説で

ある。発症と呼応するのは、ある時点の一時的体内蓄積量よりむしろ、それまで過去、体内に侵入し通過した水銀の総量だというのだ。従って魚の水銀値が高かった頃から食べ続けてきて体内侵入総量が既に発症間近の人は、汚染が低下したため、少しずつの侵入量で安全基準以下でも発症に達しやすいことになる。ただしここで注意すべきことを原田医師はTVインタビューで述べている。「単純に言うとな、例えば今まで汚染されてなかった人がグラッシーに来て、今の魚を食い続けても、今のレベルだったら、この人は水俣病になることはない。ところがグラッシーの現実の前からずっとたべてきている人ばかりなのよ。それをごっちゃに質問するからわからなくなるんですよ」(CBCTV ニュース “The National”、2010年9月7日放送)。ただしこれを調べるためには個人ごとに経年の体内侵入総量データと臨床記録史が必要となる。そして、そのデータがカナダにはあるかもしれないと思ったのだ。原田医師は、2005年に私のインタビューに次のように述べた。

「カナダの例は私が非常に世界的に大事だと思うのは、私達は1975年に臨床症状をチェックし、訴えをチェックし、しかも髪の毛の水銀を計ってるわけですね。それが30年後に残念ながら全ての人を検査する事はできなかったんだけど少なくとも27人（実際は29人*著者）ですか、チェックすることができたわけです。今は彼らの水銀値は低い。しかしかつて臨床症状がなかった人が30年後に臨床症状がでると。それは必ずしも歳をとったためにでた症状とは違うんですね。だからそれはやはりこれは有機水銀の影響だと考えざるをえない。そうなった時に30年前から現在までに彼らがどのような汚染を受けたかというようなことが分かれば、水俣病発生のメカニズムが明らかになる。それが可能なのはカナダのグラッシーナロウズとホワイトドッグの人達しかいないわけです。(略) その間にどのような汚染を受けたかということは、既にヘルス省では調べられてるわけです。」

オンタリオ州ヘルス庁が1971年に始めてから途中でカナダ政府ヘルス省に引き継がれて1996年に終了した毎年春秋の水銀検査データを使用できないかというわけだ。勿論、1975年検診と2002/2004年検診の両方に参加して臨床記録が残っている29人が、その30年間に、なるべく頻繁に毎年の水銀値検査に参加してくれれば理想的である。同時に糖尿病やパーキンソン病、筋側索硬化症などの疾患があるかどうか、またアルコール依存症かどうか、魚の摂食パターン、さらに家族の健康状態も加味した調査ができればということである。

そこで私はヘルス省宛に、その29人の個人データ請求書を作成し、本人にデータ照会了解のサインをしてもらった上でヘルス省へ送った。ところが原田医師名で送ったホワイトドッグ10人の請求書には返答がなかった。実際に10人のサインをもらい、ヘルス省へ請求書を郵送したアンソニー・ヘンリーは怒っていた。それを知ったペイスン医師（ボード査定医師）が協力を申し出てくれたため、グラッシー 19人の請求書は彼の名前で送った。すると11人のデータがぽつりぽつりとペイスンの勤務先に送られてきた。残りの8人のデータがどうしてこないのかについての説明はなかった。私がホワイトドッグの10人分もペイスン名で送ろう

とアンソニーに言う。「こちらが問いかけたのだから今度は政府が答える番であり、自分が動く必要はない」という答えだった。

11人のうち検査を受けた回数は、一番多い人が、26回の検査を20年間に渡って受けていた。以下、20回（14年）、17回（19年）、14回（19年）、12回（4年）、8回（6年）、5回が3人（18年／20年／20年）、1回が2人だった。

この資料が役立ったかどうかペyson医師が原田先生に聞く機会があったが「あれは血中値みたいね・・・」と言われただけではっきりおっしゃらなかった。各人の検査回数と期間にばらつきが多すぎて使えなかったのかもしれない。実に26回から1回までの落差があるのだ。

ちなみに1971年から1996年まで全期間の毎年の受検人数をみると、グラッシーでは最多の519人（1977年）から最少の4人（1994年）までの差異が、ホワイトドッグでは最多の632人（1977年）から最少の10人（1988年）までの差異がある（Mercury Disability Board, Cosway, Sylvia, 2001, pp.155-157）。つまり人によって毎に毎年受けた場合から散発的に受けた場合まで様々なわけだ。

このずさんさは、最初に、水銀汚染に対して、スウェーデン語や日本語の資料が読めなかったから何もしなかったとか、1969年になっても河水の水銀が魚に蓄積されることを知らなかったと主張してはばからない官僚から、漁業の禁止をしながら観光業の釣りは許す政策、水銀汚水放流停止を命令しながら代替設備完成まで5年間の放流継続を許す施政、魚を多食したトーマス・ストロングの死後、解剖して採取血液が高い水銀値を示した時に、試験管が水銀で汚れていたからだと言ってのけた医師まで共通している。トーマスの脳の解剖データがあるのだろうが裁判でもしない限り、記録は表にでてこないだろう。しかし和解合意の条件として今後この件に関する訴訟権は放棄させられているのだ。

2012年に入っても、オンタリオ州知事が約束した検診報告論文の検討の結果については、まだ何も聞かなかった。また最も抵抗力の弱い集団、妊婦、妊娠可能性の高い年代の女性と子供のために新しい安全基準を作成中と言ったヘルス省は、人間の安全基準も魚の安全基準も2010年以降に更新した形跡はない。それに呼応するかのようにグラッシーの住民達は原田医師の最後の検診論文²⁰⁾を得て英語版を作成し2012年6月に再び記者会見とデモ行進を行った²¹⁾。おかげで分かっているだけで合計5回のテレビニュース放送、2回のラジオ放送、22回の新聞掲載を通してカナダオンタリオに水銀問題があることが報じられた。カナダオンタリオ水俣病は終わっていない。

注

- 1) 原田医師の著書『水俣病は終ってない』『水俣が映す世界』と土本典昭監督の著書『水俣病遍歴』『わが映画発見の旅』
- 2) 『水俣病は終っていない』『水俣が映す世界』『公害研究』『カナダインディアン水銀中毒事件 疫学的臨床的調査』等。
- 3) cbc.ca/archives/categories/environment/pollution/mercury-rising-the-poisoning-of-grassy-narrows/are-indians-slowly-dying.html
- 4) cbc.ca/archives/categories/environment/pollution/mercury-rising-the-poisoning-of-grassy-narrows/grassy-narrows-disaster.html
- 5) トロイヤーが引用したのは原田医師、藤野医師等が、1976年に発表した検診報告論文英語版“Epidemiological and Clinical Study and Historical Background of Mercury Pollution on Indian Reservations in Northwestern Ontario, Canada”(カナダオンタリオ州北西の先住民居留地における水銀汚染の疫学的臨床的調査) Bulletin of the Institute of Constitutional Medicine, Kumamoto University, Vol. 26 No. 3,4 March 1976である。
- 6) ドライデン製紙工場下流の最初の湖。
- 7) 『水俣学研究』『カナダ・オンタリオ州先住民地区における水銀汚染 — カナダ水俣病の35年 —』第3号 pp.26 2011年3月
- 8) cbc.ca/archives/categories/environment/pollution/mercury-rising-the-poisoning-of-grassy-narrows/ontarios-mercury-response-a-debate.html
- 9) 負担者と負担額の内訳は連邦政府と州政府がそれぞれ約200万ドル(約2億円)づつ合計約400万ドル(約4億円)、汚染原因企業2社が合計で約1200万ドル(約12億円)だった。同時に先の訴訟は和解締結とともに原告の両居留地から取り下げた。
- 10) 和解金1667万ドルがそれにあたるとするなら、両居留地登録人口で割ったとすると、一人頭だいたい140万円位にしかない。
- 11) cbc.ca/archives/categories/environment/pollution/mercury-rising-the-poisoning-of-grassy-narrows/still-ill.html
- 12) 英語完成版は最終的に“Follow-up Study of Mercury Pollution in Indigenous Tribe Reservations in the Province of Ontario, Canada, 1975-2002”という題で、2004年には既に完訳版ができていたのでグラッシーや後述のハリス記者に手渡すことができた。
- 13) 結局は以下に掲載された。“Bulletin of Environmental Contamination and Toxicology” Follow-up Study of Mercury Pollution in Indigenous Tribe Reservation in the Province of Ontario, Canada 1975-2002, Volume 74, No. 4, 2005
- 14) 原田正純ほか『公害研究』『特集：カナダ・インディアン水銀中毒事件 = 2 疫学的 臨床的調査』1976 pp.13.
- 15) Harada, M. et al『体質医学研究所報告』“Epidemiological and Clinical Study and Historical Background of Mercury Pollution on Indian Reservations in Northwestern Ontario, Canada. 1976 pp.178
- 16) カナダ政府としてはこのケースで疫学調査をしようとしたことがある。

その提案は1977年4月5日のカナダ＝オンタリオ水銀委員会でなされた。席上、連邦政府ヘルス省が州政府ヘルス庁と共にドナー財団から両居留地に対し、住民の健康に対する水銀の影響に関わる困難な問題に最終的答えをだすために疫学調査を行う45万ドル(約4500万円)を供給する用意が

あると申し出た。その後、委員会では議論白熱した。反水銀オジブエグループ（Anti-Mercury Ojibway Group=AMOG）のまとめ役ドナルド・コルボーンと両酋長は、疫学調査はあくまで州政府が河閉鎖を実施する条件で受け入れると主張した。その後5月に自然資源庁トップのフランク・ミラーが、州政府はあくまで河の閉鎖を行わないと発表した。続いて連邦政府は疫学調査を、ケベックの北西で水銀中毒にさらされているクリー族の地区へ移すと発表した。河閉鎖を疫学調査実施の条件にした戦略は、調査自体が中止されて先住民側の惨敗に終わった。グラッシー酋長のサイモン・フォビスターは「自分が酋長だった間の最大の失敗だった」と後に述べた。（Shkilnyk, Anastasia M. 前掲書 1985. pp.219）

- 17) 水銀汚染されたイングリッシュ／ワビゲーン河の下流。
- 18) 前掲新聞記事のロリー・チェン毒性学教授のこと。
- 19) 1873年に大英帝国女王陛下とソートー民族の間で互いに戦争することを避け平和共存を目的に結ばれた平和協定。オジブエ族のグラッシーとホワイトドッグの住人はソートー民族の子孫である。
- 20) 原田正純ほか『水俣学研究』『カナダ・オンタリオ州先住民地区における水銀汚染 — カナダ・水俣病の35年間』No. 3, 2011.
- 21) 原田医師は参加招待されたが、病気のためメッセージをDVDで送り、集会当日会場で上映した。代わって水俣学研究センターの花田昌宣氏と井上ゆかり氏が参加した。

参考文献

- Harada, Masazumi et al “Epidemiological and Clinical Study and Historical Background of Mercury Pollution on Indian Reservations in Northwestern Ontario Canada” Bulletin of the Institute of Constitutional Medicine, Kumamoto University, Vol. 26 No. 3/4, March 1976.
- Hutchison, George and Dick Wallace “Grassy Narrows” Toronto: Van Nostrand Reinhold, 1977.
- Health Canada. Medical Services Branch. “Methylmercury in Canada 1-3” 1979.
- Health Canada. Medical Services Branch. “Methylmercury in Canada 3-3” 1999.
- Hightower, Jane M “Diagnosis: Mercury - Money, Politics & Poison” Washington: Island Press. 2008.
- Mercury Disability Board, Cosway, Sylvia “Mercury Disability Board: A Historical Report 1986-2001” 1-3, 2001.
- Shkilnyk, Anastasia M. “A Poison Stronger Than Love - The Destruction of an Ojibwa Community” New Haven:, Yale University Press, 1985.
- Troyer, Warner “No Safe Place” Toronto/Vancouver: Clarke, Irwin & Company Ltd., 1977.
- 原田正純ほか「長期経過後のカナダ先住民地区における水銀汚染の影響調査（1975－2004）」『環境と公害』Vol.34 No.4, SPRING 2005, pp.3-4
- 原田正純「安全基準への問題提起」『水俣病：20年の研究と今日の課題』青林舎、1979、pp.316